



#42

花の命は短くて……

著:藍澤たすく

イラスト:かもめ遊羽

俺は幼なじみの悠花に人気のない公園の裏山に呼び出された。まだ残暑の厳しい休日の午後。蟬の鳴き声がやたらと耳につく。

「あのね……」

俺の正面に立った悠花がおずおずと口を開いた。

簡素な刺繡の施された白いワンピースに、薄いピンクのリボンが巻かれた麦わら帽子……

という、いかにも夏らしいさっぱりした格好だ。心なしかいつもより頬が紅潮して見える。

「あたし実はね……」

俺を見つめる瞳も何かいつもと違う。一言でいえば、真剣だ。

長い黒髪がさらさらと微風に揺れている。

（これは……）

俺はぐくりと唾を呑んだ。

これはあれじゃないか。いわゆる告白シーンというやつじゃないか……!?

いや、ちょっと待て！ そんな俺、心の準備ができないし、いきなり言われても……そりや、悠花の事は嫌いじゃないし、いやむしろ好きだけど、そういう恋心っていうんじゃなくて……っていうか、ちょっとLIKEじゃなくてLOVEな気持ちもあるにはあるんだけど……あるんだけど、いきなりはまずいつてばよー！

「あたし、あたし、実はね……」

俺がドギマギしている間にも悠花はどんどんこちらに迫ってくる。

ちょ、ちょっと待ってくれー！ マジで心の準備しねえと、こっちの心臓がばくばくって爆発しそうだ！ 賴む、もう少し時間をくれー！

「頭がおかしくなっちゃったの！」

「……は？」

俺が思つてたのと、ちょっと……いや、全然違う台詞^{せりふ}が悠花の口から飛び出した。

「あのね、頭がこんな風になっちゃったの！」

悠花がちょっと泣きそうな顔で麦わら帽子を脱いだ。そこにあつたのは……。

「なんだそりや……？」

俺は悠花の頭の上に咲いているひまわりを指さした。

「知らない！ 今日朝起きたら生えてたの！」

俺はもう一度まじまじと悠花の頭を見つめる。

黒髪に覆われた頭頂部から緑の茎^{くき}がすーっと伸びている。

そしてその先にあるのはひまわりの小さな花。

とても夏らしい。

つて、言つてる場合か！

……俺をからかつてるのか？

口をついて出てきた冷たいトーンの台詞に、俺は自分でもちよつと戸惑った。

つていうが、そうだよ。

豈かと思つて超ドキドキしてたのに、さすがにこの展開はねえと

蓮うんたよ
ひろくん！
本当に！
本当に生えちゃってるの！

どーせ、オモチャの造花でも差してんだろ……ん?

俺はひまわりの茎を引つ張った手に違和感を覚えた。

二ハの、すぐハしつかり慾花に銀付ハてハやがる。

まるで悠花の頬の中から直接生えてるみたハコ……。

「痛い！ 痛いよ、ひろくん！ そんなに引っ張らないでよ！」

あ！ ああ、 悪りい……」

俺は慌ててひまわりから手をひとつこめる。

信じられないが、どうやら本気で頭からひまわりが生えてしまつたらしい。

……つていうか、そんなことあるのかよ！

ひろくん どうしよう……このままじゃ、あたし、どこにも行けない……

ハツピーみたいな感じっていうか……

そこまで言つて俺は悠花の冷たい視線を感じた。

この残暑を吹き飛ばすような極北の視線だ。

俺的にはフォローのつもりで言つてみたのだが、どうやら完全に逆効果だったようだ。

……とりあえず、病院に行ってみたらいいんじやないか?』

病院つて何科に?.

何科に付てそりや……

言葉に詰まつた。

確かに頭に花が生えました……つて病院に行つたら速攻で頭のおかしい人認定されてしま

あははは、ママー、すごいよー！　あのお姉ちゃん、頭にお花咲いてるー！」
しつ！　タカシ、見るんじやありません！　早くこっちに来なさいー！」

お前ひまわりの種でも食つたのか？」

「ひろくん、全然真剣に考えてくれてない！ あたしの事、大切じゃないんだ!?」
「言うが早いか、ぶーっと膨れてそっぽを向きやがった。

「そ、そんなことねえよ！……あ、そうだ、それ切っちゃえばいいんじゃね？」
「そんなの最初にやつたよ！でも葉っぱを切つていつたら、まるで自分の体を切つてるみたいにすごい痛かつたんだもん！これ以上無理だつたんだもん！」

なるほど、だから茎と花だけなのか。

といふか、痛覚神経も悠花と直結してゐることか……そいつはやつかいだな……。

「どうしよう、あたしずつとこのままなのかな……ずーっと頭お花畠なのかな……」

あからさまにしょぼーんとする悠花を見ていたら、さすがに俺の気持ちも落ち込んできた。

よくたとえで「ひまわりのよつな笑顔」とか言うけど、こいつの場合は「ひまわりを乗せた困り顔」だな。つて、なんのシャレにもなりやしねえ。

何かいい解決策はないのかなあ……。

「あつ！」

突然、俺の頭に天啓てんけいひらめが閃いた。

「悠花、ちょっとついてこい！」

「え？ 何、ひろくん？ どうしたの、急に？ あつ……そ、そんなに引っ張らないでよー！」



「ハハに頭をつけるんだ！」
「は？」

公園の噴水前にやつてきた俺は、悠花に自信満々にこう言い放つた。

「……どういうことなの、ひろくん？」

悠花があからさまに訝しげな表情でこちらを見つめてくる。

「いいか、悠花。逆に考へるんだ！ 見たところそのひまわりはまだ小さい。つまり成長しきつてないってことだ。だからここでたんまりと水をやればぐんぐん成長していくって……」

「大きい花になつて、種をつけたあと枯れちゃう！ 枯れればとれる！」
「その通り！」

我ながら素晴らしいアイディアだ。

「すつごーい！ ひろくん、伢えてるー！」

「ま、まあな

俺の両手を握りしめてぴょんぴょんとジャンプする悠花。

その……おっぱいが……揺れててちょっと目の毒だぜ……。

「それじや、早速いくね。よいしょつと……」

悠花がおずおずと頭を噴水の水のかかるところに差し出した。
頭に花を咲かせた女が噴水に頭を突っ込んでいる……傍目には完全に危ない人だが、そんな

ことを気にしている余裕はない。

「おつ……」

しばらくして俺は思わず声を洩らした。

なぜなら水を吸つたひまわりが見る間にぐんぐんと成長しだしたからだ。

「すごい、ひろくん！ どんどん大きくなつてくよ！」

「ああ、すげえな！」

頭に生えるだけであつて、やはり普通のひまわりとは違つのだろう。

通常の植物では考えられないスピードで成長を続けていく。

やがてひまわりは悠花の身長と同じぐらいの高さにまで成長して立派な大輪の花を咲かせた。

「よし！ あともう少しだ！ あともう少しでこいつは種をつけて枯れる……って、悠花？」

そこまで言つて俺は悠花の様子がおかしいことに気がついた。

顔からすっかり血の気がひいてる。

目も虚ろで意識が朦朧としているようだ。

「悠花!?」

俺の呼びかけにも反応しないまま、悠花は何も言わずにそのままゅつくりと噴水の池へと倒れてしまう。その全身に、噴水の水が容赦なく降りかかり始めた。

俺は慌てて悠花の許に駆け寄つた。

「悠花！」

「どうした、悠花！ おい！」

まったく反応がない。どうやら完全に気を失つてしまつたようだ。

「うわ……」

俺は思わず目を見開いた。なぜなら。

「やべえ、透けてる……」

濡れたワンピースの向こうに禁断の柔肌^{やわらぎ}が見え隠れしていたからだ。

これはやばい、目の毒つてレベルじゃないぜ！

「ひろ……くん……」

「悠花！」

悠花の弱々しい呼び声に、なんとか俺は正氣を取り戻した。

「なんだか……変なの……体から……どんどん力が抜けていつて……」

「！」

瞬間、俺は自分の過ちに気がついた。

ちくしょ、何が素晴らしいアイディアだ！ 俺のアホ！

こいつは水と一緒に、悠花から栄養も吸い取つてやがるんだ……！

「悠花！ おい、悠花！」

再びぐつたりとしてしまつた悠花を、俺は必死に振り動かす。

そんな悠花とは対照的にひまわりの花はぐんぐんと成長を続いている。

花の大きさはバスケットボールよりも大きくなつているぐらいだ。

「くそ！ やめろ！ やめろよ、このクソひまわり！」

俺は闇雲に花を拳で殴りつけた。

しかしまたたく効果はなく、花はかえってどんどん大きくなっていく。

「やめろ！ やめろって言つてんだろ！」

「やめろがー！」

俺はさらに力を込めて花を叩く。

普通の花と違つて堅いそれは、俺の拳を簡単にはじき返してくる。

くそ！ このままじや……このままじや……

ボンッ！

「!?

突然俺の視界が何かに塞がれた。

種だ。

突如爆発したひまわりの花から膨大な量の種が周りにまき散らされている。

種だ。

「これは……」
呆然とする俺をよそに、種を放出し終えたひまわりは、ぐつたりと頭を下げ、そのまま枯れてしまつた。そしてボロリと悠花の頭からとれる。

「ひろ……くん……？」

「悠花?」

悠花がうつすらと目を開ける。

「よかつたな、悠花！ 取れたぞ！ ひまわり取れたぞ！」
「うわ……すごい……」

「?」

「！」
幻でも見ているのか、悠花がうつとりと変なことを呟いた。

しかし俺も悠花が何をすごいと言つてているのか、すぐに気がついた。

ひまわりだ。

さきほど放出された種が瞬く間に発芽し、葉をつけ、その花を咲かせている。

見渡す限りの、ひまわり、ひまわり、ひまわり。

昔洋画で見た広大なひまわり畑のように、公園中がひまわりで埋め尽くされている。

おしまい

「あのね、ひろくん……」

「ん?」

悠花が潤んだ瞳で俺の方を見上げてくる。

「もしかしたら、あのひまわりって……あたしの気持ちが……想いが……生えて来ちゃったのかかもしれない……」

「?」

悠花が意味不明の事を言つてくる。

「ひろくん、ひまわりの花言葉つて知ってる?」

俺が首を振ると、悠花が頬を朱に染めながら教えてくれた。

ひまわりの花言葉は——「愛慕」あなただけを見つめている——である、と。

「そ、それつてもしかして……」

「あっ」

俺がおずおず問い合わせようとした時、悠花の表情がぱつと輝いた。

そして「ひまわりのような笑顔」でこう言つた。

「ひろくんもあたしと同じ気持ちなんだ！ 嬉しい！」

「?」

俺は——悠花の視線の先——すなわち自分の頭に手をやつた。
そしてその指先には、小さなひまわりの花が触れたのだった。